

◆ 今週のコメント

- ・ アメーバ赤痢(腸管アメーバ症)の報告が2例(共に40歳代男性)あります。本年の累積報告数は15例です。推定感染経路は性的接触が5例, 不明が10例です。性別は男性 14例, 女性 1例で, 年齢階級別では40歳以上が86.7%を占めています。
- ・ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症の報告が1例(男性, 50歳代)あります。血清群はC群です。症状はショック, 腎不全, DIC, 中枢神経症状で, 推定感染経路は不明です。本年の累積報告数は6例となっています。症状は全6例中, 腎不全が5例, DICが5例, 中枢神経症状が4例, 軟部組織炎(すべて創傷感染例)が4例で, 推定感染経路は創傷感染が4例, その他が2例です。
- ・ 風しん(検査診断例)の報告が1例(男性, 30歳代)あります。症状は発疹・発熱・関節痛・関節炎で, ワクチン接種歴は不明です。推定感染地域は国内で, 推定感染経路は接触感染です。本年の累積報告数は26例と非常に多くなっており, 性別は, 男性17例, 女性9例, 年代別は, 20歳代が7例(26.9%)と最も多く, 次いで30歳代及び40歳代が各6例(23.1%)となっています。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は11.61(476例)で, 3週連続で減少していますが, 依然として過去5年平均値を上回っています。
- ・ A群溶血性レンサ球菌感染症の定点当たり報告数は1.44(59例)で, 前週(0.90, 37例)よりも増加しています。例年, 冬から夏前まで報告数が多い状態が続きますので, 今後の動向にご注意ください。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は0.40(27例)で, 先週(0.21)に比べ, 倍増しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類: 結核 1例(肺結核 1例, その他結核 なし, 潜在性結核感染者 なし)うち喀痰塗抹陽性 1例
【1月以降の累積報告数 433例(肺結核 181例, その他結核 91例, 潜在性結核感染者 161例)うち喀痰塗抹陽性 89例】
- ・ 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 2例【1月以降の累積報告数 15例】
- ・ 五類: 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 6例】
- ・ 五類: 風しん 1例【1月以降の累積報告数 26例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.40	27
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	11.61	476
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.44	59
	③ 水痘	1.27	52
	④ RSウイルス感染症	0.63	26
	⑤ 突発性発しん	0.46	19
眼科	流行性角結膜炎	0.50	5

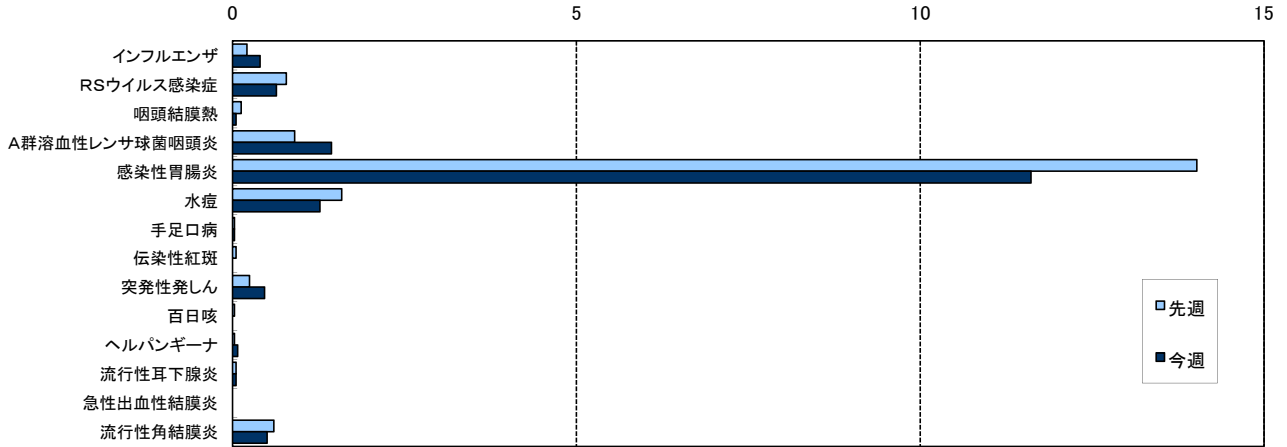
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

(注) 京都市のデータは, 平成24年12月27日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。
また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

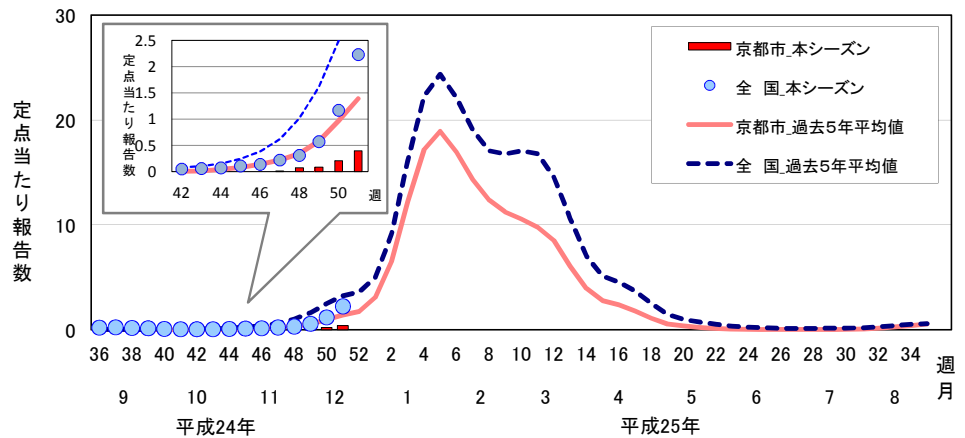
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第51週)と先週(第50週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

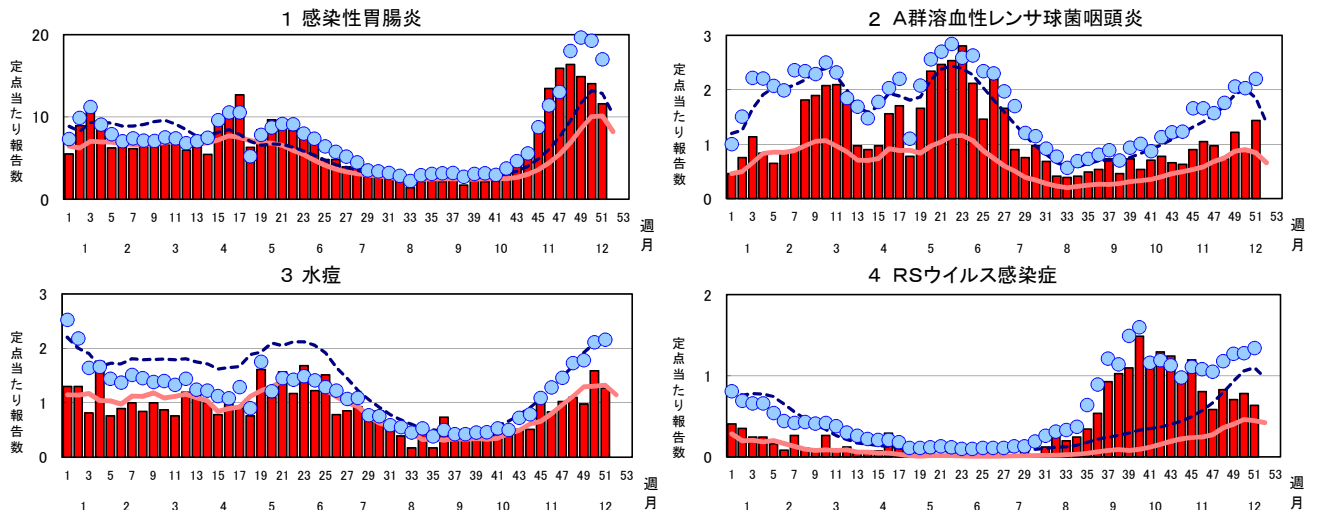
週	報告数(例)
第47週	1
第48週	5
第49週	6
第50週	14
第51週	27
累積報告数 (第36週以降)	56



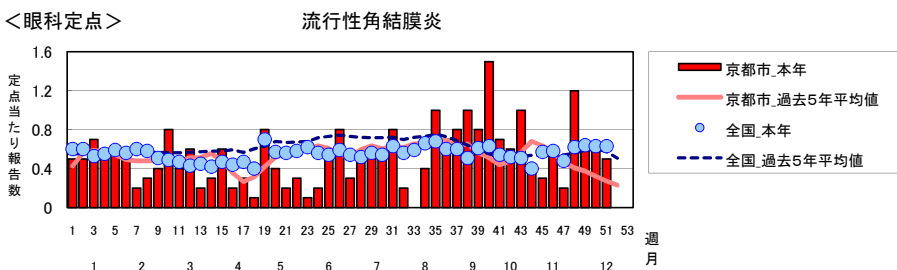
*平成21年/22年シーズンは、インフルエンザ(H1N1)2009の影響で、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



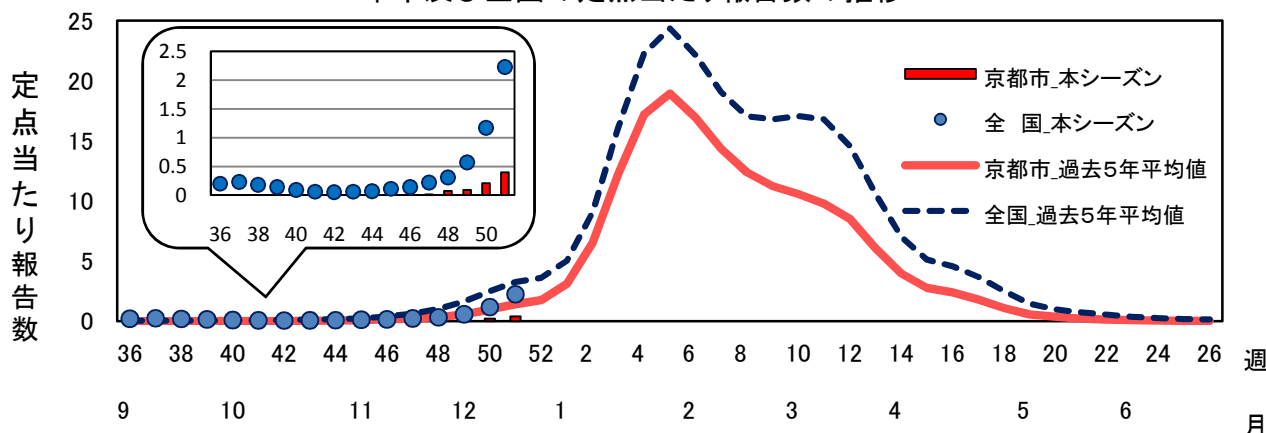
第51週(12月17日～12月23日)トピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は0.40(27例)で、先週(0.21)に比べ、倍増しています。

全国の定点当たり報告数は第50週(1.17)に1.00を超え、第51週は2.23と倍増しています。都道府県別では、滋賀県、山口県を除く45都道府県で前週より増加しており、30道府県で定点当たり報告数が流行開始の目安となる1.00を超えています。今後の動向にご注意ください。

京都市衛生環境研究所では、11月に受け付けた検体から、AH1pdm09が1例分離されています。全国のインフルエンザウイルス分離・検出報告状況(1月4日現在)をみると、今シーズンはA(H3)亜型が約85%を占めています。

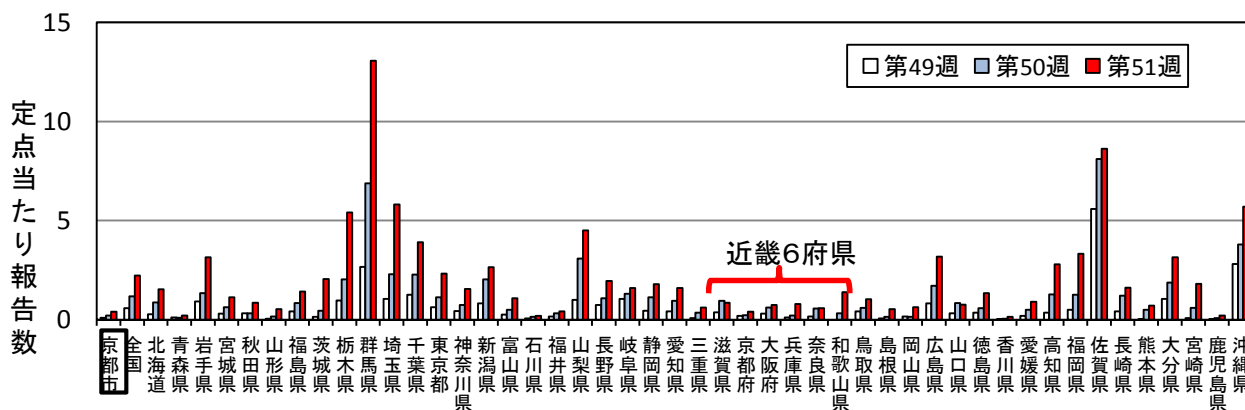
本市及び全国の定点当たり報告数の推移



※平成21年/22年シーズンは、インフルエンザ(H1N1)2009の影響で、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

注)先般、2009年に大流行したインフルエンザはインフルエンザ(H1N1)2009とすることが決められています(厚生労働省)。また、その原因ウイルスについてはWHOはA(H1N1)pdm09と記載することを勧めています。国立感染症研究所ではN型の型別判定をしていないときはAH1pdm09と略記しています。

都道府県別定点当たり報告数の推移



全国のインフルエンザウイルス分離・検出数(1月4日現在)

